
 < 書 評 >

「義 手」

岡山大学教授 児玉 俊夫 監修

岡山大学講師 武智 秀夫, 明石 謙 著

石 田 肇

このたび、武智、明石両先生の力作「義手」が世におくられるにいたったことは、まことにご同慶にたえません。両先生は、すでに「義足」、「装具」について名著を出版され好評を得ておられますが、そのしめくくりとして、いちばん難物の「義手」にいて、多年にわたる業績の結晶として本書を世に問われたものと拝します。

本書の成り立ちは、人間の手の意義にはじまり、義手の歴史におよび、上肢切断および各種義手の各コンポーネント、装着訓練、総合判定、処方におよび、さらに補足として日本における義手の問題点、最近流行の術直後義肢装着法、種々の検査表、用語一覧表で英、独、日を対比して記載され、心にくいばかりに、かゆいところに手の届いた執筆ぶりを示しておられます。

とりわけ、冒頭の義手の概念、人間の手の意義および歴史の変遷に関しては、著者の文学的才能と相俟って、いっきに読みとおしてしまう興味ある記載であり、断端の運動学は、類書にみない基本的かつ独創的な項目で適切な図説とともに高く評価されるべきものであります。

日本では現在あまり普及していませんが、能動義手の問題は、機能的にもすぐれ、部品、ソケット、ハーネ

ス、そのアライメントなどにつき、初心者にも十分理解できるように容易に、委細に述べられており、本書の中核をなす部分でもあります。

なお内容を up-to-date のものにする努力として、体外力源の義手もとりあげ、近年 biomechanics の発達とともにすでに実用の域に達している本邦の早稲田ハンドや、徳島大学、熊本大学電動義手などもとりあげ紹介していることは、まことに意義のあることと思います。最後に、上肢切断者への総合的なアプローチとしてのリハビリテーションの問題は、いろいろの問題を包含していますが、本書の約 1/3 の紙数をこれに費し、より具体的に、より即物的に記載され、機能面のみならず、精神、心理面、応用動作としての ADL 指導をもカバーした、目の前の患者にすぐに応用できる実際の、実戦的な記載に本書一つの特徴がでています。義手の適合判定および処方の項目は、いくつかの具体的な処方例を示し、また適合判定に用いる道具およびその検査の写真説明は親切なとりはからいと思います。

著者も述べているように、上肢と下肢とは本質的に異なるものであり、下肢切断者の場合は歩行という生活に不可欠な条件を満たさねばならないので、義足は少々不出来でも

患者はやむをえずつけてくれるのがその通例であります。上肢切断の場合は事情がまったく異なり、一側に健康な上肢が残った場合、80%以上の ADL は片手で可能であるので、煩雑、不細工でかつ、つけ心地のわるい感覚のない義手は無視されることの多いのが現状で、義手に対して患者のニーズも低く、形さえよければと美観的なことのみを問題にすることも少なくありません。精密機械、時計、カメラ、電気製品で世界の水準に群をぬいているわが国において、精巧な義手が製作できないのは奇異な感を抱かせるものでありますが、現実にはなかなか厳しい現状と思われます。

この時にあたって、かかる問題の解決の絆として本書が出版されることは、まことに意義が大きく、切断者を取り扱う医師にも、義肢製作者、理学療法士、作業療法士にも、その他のパラメディカルスタッフにも、一読に値する名著として広く諸賢にお薦めする次第です。もちろん本書の価値は読者の決定する事柄ですが、浅学非才な私自身が、いっきに読了し、裨益されることの多かったことを蛇足として一言つけ加えておきます。(日医大整形外科助教授)

A 5・頁286・図107・写真 157

¥2,800・¥140 医学書院刊